

平成二十七年 度

# 日本近世文学会秋季大会

## ・大会プログラム

## ・研究発表要旨

期日 十一月七日(土)・八日(日)・九日(月)

会場 徳島文理大学香川キャンパス

(十三号館講義棟一階一三三教室)

〒769 2193 香川県さぬき市志度一三三-四一

一、出欠の葉書を十月二日(金)必着でお出しく下さい。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。

二、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(日本大学生物資源科学部)へお申し出ください。

三、大会経費は、参加費千円、懇親会費六千円です。

四、送金は同封の振替用紙(口座番号〇一六八〇〇一―一六九五四七、口座名「日本近世文学会秋季徳島文理大学香川キャン」)で、十月九日(金)までに振り込みをお願いします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。

五、大会二日目(十一月八日)日曜日の昼食に弁当(千円)を用意いたしますので、ご希望の方は同封の振替用紙で送金ください。

六、大会に不参加で、発表資料をご希望の方は、出欠葉書の当該欄に御記入の上、同封の振替用紙にて、資料請求代千円を払い込んでください。大会終了後、資料を郵送いたします。

七、三日目(十一月九日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

八、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。

九、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。  
一〇、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会秋季徳島文理大学大会事務局

徳島文理大学文学部日本文学科 佐々木研究室

〒769 2193 香川県さぬき市志度一三三-四一

電話 〇八七―八九九―七二六六(直通)

メールアドレス sasakti@kagawa-bunri-u.ac.jp

# 日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。  
さて、平成二十七年秋季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成二十七年九月二十五日

【会場】徳島文理大学香川キャンパス

【行事】

第一日 十一月七日(土)

委員会 会 (一三・〇〇～一四・二〇)

委員会会場 五号館講義棟一階一〇二教室

大会受付 (一三・四〇)

開会時間 (一四・三〇)

研究発表会 (一四・四〇～一五・四〇)

研究発表会会場 十三号館講義棟一階一二三教室

1 未紹介小津桂窓宛木村黙老書翰七通について

2 近世期の平賀源内伝の検討―『平賀実記』をめぐって―

講演 (一六・〇〇～一七・〇〇)

近世中期高松藩の政治と文化―平賀源内を生んだ歴史状況―

懇親会 (一八・〇〇～二〇・〇〇)

懇親会会場 サンマリエフジイ

〒769-2101 香川県さぬき市志度 二二三三十一

電話 〇二〇一八四―三三三三八

日本近世文学会秋季大会会場校代表 佐々木 亨  
日本近世文学会事務局代表 倉員 正江

〔事務局連絡先〕

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野一八六六

日本大学生物資源科学部 一般教養

国語・国文学研究室(2)

電話 〇四六六―八四―三七八一

FAX 〇四六六―八〇―一〇八二

e-mail info@kinseibungakukai.com

同朋大学 服部 仁

日本女子大学 福田 安典

香川大学名誉教授 木原 溥幸

第二日 十一月八日(日)

大会受付(一〇・〇〇)

研究発表会 午前の部(一〇・三〇)～一二・〇〇)

研究発表会会場 十三号館講義棟一階一一三教室

3 新出の横写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」と徳川家康における藤原定家の筆跡愛好について

大東文化大学 高橋利郎

4 二十一史通説に見る林鶯峰の学問姿勢

愛媛大学 田中尚子

5 二十一巻本『武功夜話』書誌調査報告および尾張藩士内藤東甫享年への疑義

国立豊田工業高等専門学校 松浦由起

昼 休み(一二・〇〇)～一三・三〇)

編集委員会会場 五号館講義棟一階一〇二教室

研究発表会 午後の部(一三・三〇)～一四・三〇)

研究発表会会場 十三号館講義棟一階一一三教室

6 永井洵美の文事と活動―中川文庫蔵『洵美草』『行程日之記』周辺をめぐって―

九州情報大学(非) 進藤康子

7 休甫作『播磨国室津一見道記』について

京都府立大学 母利司朗

閉 会(一四・四〇)

第三日 十一月九日(月)

文学実地踏査 資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

図書展示 幕末維新期の武張った世界 小展

日時 十月下旬～十二月下旬 一〇・〇〇～一七・〇〇

場所 十六号館リサーチアンドメディアライブラリー記念室

※会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。

# 未紹介小津桂窓宛木村黙老書翰七通について

同朋大学 服部 仁

小津桂窓は、伊勢松坂の三井家に次ぐ豪商の一人であった。一方、木村黙老は高松藩松平家の江戸家老まで勤めた人物であった。この二人の結節点は、曲亭馬琴である。この二人に、小津桂窓を馬琴に紹介したところの、これまた松坂の豪商殿村篠斎と、三千石の旗本石川畳翠（脚気で早死にしよう）の二人を加えた四人を、馬琴は四友と呼んだ。この四人が馬琴作の読本や合巻の批評をし、その可否を馬琴が答えるのである。この文藝活動を「評答」と名付けたのは、濱田啓介氏であった。黙老が江戸家老の勤めを終え、高松へ帰ってからは、黙老と篠斎、また黙老と桂窓は、書簡のやりとりをして情報交換をしている。『天書善本叢書 馬琴書翰集 翻刻篇』（昭和五十五年、天理大学出版部刊）に、「附録 黙老書翰集」として、黙老書翰三十六通が収められているが、大部分は篠斎宛で、桂窓宛は七通だけである。本発表で採り上げる七通は、弘化二年（一八四五）から嘉永二年（一八四九）頃のものと思われ（年不詳の二通もこの時期のものであろう）、内容は、黙老の大部の記録随筆「聞まゝの記」「続聞まゝの記」の写本複製とか、篠斎の『玉石童子訓』の批評の回覧、馬琴の遺品を分与してもらったこと、篠斎家の当代の主人が文事に関心がないこと、そして世情のこと（北亞墨利加船の長崎来航、善光寺大地震、浪花の若年の大盗）など、興味深いものがある。七通すべて示すが、時間の都合上、興味を引く数通を紹介する。

# 近世期の平賀源内伝の検討

—『平賀実記』をめぐる—

日本女子大学 福田 安典

平賀源内については、死後まもなくより、『翻草盲目』『鳩溪遺事』など虚実まじえた書が作成された。天明八年の序を有する竹窓樸斎老人の『平賀実記』はその代表である。

この『平賀実記』については、水谷不倒翁の『平賀源内』までは伝記資料として扱われたが、近年は城福勇氏がその信憑性を疑っている（『平賀源内の研究』）ように、平賀源内の実像を伝えたものではないとみなされている。

一方では、この『平賀実記』は写本の形で流布したと思われる、その過程で大田南畝が頭注を付しているが、その頭注自体は逆に平賀源内の伝記資料としては第一級のものとして扱われている。そして、その南畝の頭注をそのままに写した転写本が複数存在している。

本発表では、その南畝頭注付きの『平賀実記』の転写が一応落ち着いたと思われる文化五年をもって、近世期における平賀源内伝の形成について論じるものである。虚像の流布に対し、南畝の証言を取り込む形でその実像を追いかけていた近世期の平賀源内伝の実態、特に『一話一言』からの取り込みを中心とした伝記作成の過程を明らかにしたい。

## 新出の模写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」と 徳川家康における藤原定家の筆跡愛好について

大東文化大学 高橋利郎

この発表では、成田山書道美術館が所蔵する模写本「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」の概要を紹介し、藤原定家の自筆であったと考えられるこの模写本の原本を想定する。さらにこの懷紙が徳川家康による自筆模写本である可能性について検討する。

この懷紙に記される二首の歌は、建仁元年（一一〇一）の後鳥羽上皇の熊野御幸に随伴した定家が滝尻王子で詠んだものであり、定家筆『熊野御幸記』にもその記載が見られる。現存する他の「熊野懷紙」と書式や書風などを比較すると、この懷紙は原本に忠実に模写されたものと推測され、原本の所在が不明である「熊野懷紙〈河辺落葉・旅宿冬月〉」の近世初期の写本として一定の意味を持つものと言える。

さらに、家康は、このほかに何件かの定家の筆跡を模写していて、この懷紙もその自筆である可能性が高い。定家の遺墨と家康との接続点には、しばしば冷泉家の当主である冷泉為満の存在を認めることができる。家康は為満から古今伝授を受けており、冷泉家の歌学とともにその書法も修得したものと考えられる。家康の定家の筆跡愛好は、和歌への関心とも重なり合い、主に茶人のあいだで展開された定家様の書風の起点を成すものとみられる。こうした家康の歌と書にわたる定家愛好は、宮廷文化の受容と継承を背景とする、近世初期の文学や書をめぐる文化的な志向を表すものであることについても言及したい。

## 二十一史通読に見る林鷺峰の学問姿勢

愛媛大学 田中尚子

江戸前期の儒学者、林鷺峰の特筆すべき業績の一つに『本朝通鑑』編纂がある。その編纂の次第は彼の日記『国史館日録』に詳述されるとおりだが、発表者は以前、その記述の検討から、史書編纂と連動する形で膨大な資料が国史館内に収集整理されていく様、その中であって鷺峰が特に『三国志』を重視していたことを指摘した。

だがその一方で、『三国志』を単体ではなく二十一史の枠組みの中で捉えることも必要となる。というのも、鷺峰は『本朝通鑑』編纂開始前にその通読に着手し、編纂終了後もそれを継続しているなど、史書編纂の参看資料として利用するのは別に、二十一史それ自体と向き合っていたのも事実なのである。

このような鷺峰の史書への取り組み姿勢を考える上では、『国史館日録』と『南塾乘』（編纂終了後の日記）とを併せ読むことが有効で、それによって編纂前後での彼の学問姿勢の変化ならびに一貫性を浮き彫りにすることができる。そこで本発表では、両日記内での二十一史への言及記事とその記事に対応する二十一史の跋文を俎上に載せ、鷺峰の学問の実態把握に努める。

この考察は二十一史の問題に留まるものではない。すなわち、二十一史への取り組みは彼の儒学者としてのスタンスを反映したものであり、彼が手がけた賛の数々もこれと呼応するものであったと考えられる。そしてそこには時に父羅山の存在も垣間見ることができるのである。

## 二十一巻本『武功夜話』書誌調査報告および尾張藩士内藤東甫享年への疑義

—『前野村前野氏系図』巻二の記述を巡って—

国立豊田工業高等専門学校 松 浦 由 起

『武功夜話』は、織田信長・豊臣秀吉に仕えた前野家（現吉田家）先祖の武功を記す家伝記である。三巻本、三巻五冊本、六巻本、八巻本、二十一巻本等、数種類の写本が伝わっている。江戸時代初期、寛永期に吉田孫四郎雄かつかねが編纂したものを、代々の吉田家当主が書写し、増補改訂を加えたと考えられる。偽書との説もあるが、近年、愛知県史編纂委員会織豊部会の調査により、江戸時代後期の作成が確認された。

蜂須賀小六などとともに活躍し、但馬一国の城主となった前野長康は、秀次事件に連座して失脚したため、蜂須賀家のように大名家として存続することができなかった。『武功夜話』は、武門を捨て改名し、庄屋役となつて徳川時代を生きた吉田家のアイデンティティを語る物語である。今回、二十一巻本について、書誌を調査する機会を得たので、その報告を行いたい。

また、三巻本『武功夜話』と同筆と思われる『前野村前野氏系図』巻二に、尾張藩士内藤東甫が前野家に立ち寄つた記述がある。内藤東甫は絵をよくし、同じ尾張藩士であつた俳人横井也有と多くの合作を残している。また藩命によつて『張州雜志』という百巻に及ぶ地誌を残しているので、調査のため、藩内各地の庄屋宅に滞在することもあつたと思われる。ところが、前野家に立ち寄つたという「元文二年」では、通説の東甫の生没年からは、幼少期に立ち寄つたことになる。他の資料、特に岩瀬文庫所蔵の東甫自筆と思われる『手杵』などを根拠に、享年は六十一歳ではなく、八十一歳である可能性を示したい。

## 永井洵美の文事と活動

—中川文庫蔵『洵美草』『行程日之記』周辺をめぐって—

九州情報大学(非) 進 藤 康 子

大枝流芳の香道の流れを汲む永井洵美（文安）については今まであまり語られていない。しかし、肥前鹿島の文人大名鍋島直郷を研究するにあつて、その師鷺河申也、酒井秀実、井田道祐正勝らと共に、直郷の文事に關して重要な人物であることがわかつてきた。

祐徳神社博物館蔵中川文庫には、洵美自筆の『洵美草』（寛保二年）、『書写山詣記』（宝暦一三年）などの紀行作品があり、その他にも『溪雲問答』（宝暦四年洵美跋）、『耳底記』（宝暦二年洵美写）、『春樹顯秘密抄』（寛延四年洵美写）、『庚申伝』（宝暦二年四月洵美写）などの写本がまとまつて存する。

加えて、洵美と直郷との密接な交流の跡を裏付ける資料として、鹿島から伏見に至る直郷の紀行『行程日之記』（寛保二年）がある。大坂に着船した四月一日から三日までの毎日、直郷は洵美に面会している。茶話会の席で、書物調達や宣阿の話などが出ており、また、丁度この時期に直郷は『洵美草』等を入手した可能性も窺える。

本発表では、当該資料のあらかたの紹介と、洵美が直郷から特別に扶持を下され、直郷の「御家来同前」（『文格』）と称されていた事などを報告し、直郷の文事の指南役としての洵美を考察すると共に、伊藤東涯門の儒者であり、『孟浩然詩集』の点者でもある事などに注目し、洵美の文事とその活動の実体を明らかにする。

## 休甫作『播磨国室津一見道記』について

京都府立大学 母 利 司 朗

大坂の伝説的俳人休甫については、『西鶴名残の友』の逸話によって、飄々とした、自由気ままな生きざまの俳隱者像が定着している。しかし休甫生前の人となりをうかがいうる資料は意外に乏しく、塩村耕氏御紹介の『若衆歌舞伎縁起卷』と岩瀬文庫蔵の『津田休甫歌文卷』が知られるほどにすぎない。家蔵の『誹諧拾葉集』（明和六年写・東柳窓燕志自筆・十冊）の中に写された『播磨杉原』（可申編・延宝四年刊か）という俳書（版本未見）は、その休甫が、ある年の九月十三日に大坂を船出し、播磨の名所室津に遊んだ折の紀行文（『播磨杉原』の序では「播磨国室津一見道記」と呼んでいる）を紹介したものであり、休甫の人となりをうかがえる新しい作品である。

序の中では、可申の父が貞徳の門人で、休甫の旧友であったこと。その縁で、幼ない頃休甫の膝の上で手習いの手ほどきを受けたことなどが懐かしく回想されている。休甫の生きざまを「水にしたがふ瓢箪」にたとえ、その筆跡を「ことやう（異様）」と評す点は、休甫像の最も早い記述といえる。紀行文の中には、野天で興行する大坂の「まひまふ人」を氣遣う場面や、明石の宗玄寺・人丸寺で馴染みであった若衆を回想する場面も見える。また、『古今夷曲集』の中で述べ懐歌的あつかいをされる「世にくへぬ」狂歌が、本来は、書写山辺りの秋景散策の中で氣樂に詠まれた狂歌であることもわかる。寛文から延宝ころにかけては、休甫の伝説化が、相当に進んでいたのであろう。

## ◆会場へのアクセス

### ○飛行機利用の場合

高松空港→高松築港→JR 高松駅

※空港からリムジンバス利用で高松築港まで約 35 分、JR 高松駅まで約 40 分

### ○JR 利用の場合

岡山→高松（瀬戸大橋線）※快速で約 60 分

高松→志度（高德線）※特急（有料）で約 15 分、普通（各停）で約 30 分

### ○琴電（高松琴平電気鉄道）利用の場合

高松築港→瓦町 ※約 5 分

瓦町→琴電志度（志度線）※約 35 分

### ○JR 志度・琴電志度から会場まで

タクシー 約 10 分

※ JR 志度駅北口にタクシー乗り場、琴電志度駅南隣にマルセンタクシー車庫あり

タクシー電話番号 マルセンタクシー 0120-08-8856

玉浦交通 0120-380-143

徒歩 往路約 25 分、復路約 20 分

### ○高速バス利用の場合

高速志度バスストップで下車 車で約 10 分、徒歩約 25 分

### ○自家用車あるいはレンタカー利用の場合

志度 IC から北へ約 10 分

正門右側駐車場（66 台駐車可能）あるいは東門右側駐車場（100 台駐車可能）利用のこと

## ◆貸切バスのご案内

JR 志度駅から香川キャンパスまで、下記の通り無料貸切バス（24 人乗り小型バス）を運行します。

【第 1 日】11 月 7 日（土）

〔往路〕JR 志度駅北口前 → 香川キャンパス（約 10 分）

発車時刻 12:30 頃（★）／① 13:25 ／② 13:45 ／③ 14:10

★のみ 9 人乗りジャンボタクシー（委員会用）

大会会場から懇親会会場へはバスにてご案内します。

懇親会終了後は JR 志度駅までバスでお送りします。



【第2日】11月8日（日）

〔往路〕 JR 志度駅北口前 → 香川キャンパス（約10分）

発車時刻 ① 9:30 / ② 9:50

〔復路〕 香川キャンパス → JR 志度駅北口前（約10分）

発車時刻 ① 15:15 / ② 15:40

JR 志度駅の出入は北口（駅西側にローソンがある方の出口）をご利用下さい。  
JR 志度駅と琴電志度駅は、国道11号線を挟んで100メートル弱のところにあります。

◆乗り継ぎ時刻表

【第1日】11月7日（土）

〔往路〕

JR 高德線	高松	志度		貸切バス
	12:50	→ 13:15	→	① 13:25
	13:12	→ 13:27 (特急)	→	② 13:45
	13:40	→ 14:05	→	③ 14:10

琴電	高松築港	瓦町	瓦町	琴電志度	貸切バス
	12:30	→ 12:35 …	12:46 →	13:20 →	① 13:25
	12:48	→ 12:53 …	13:06 →	13:40 →	② 13:45
	13:15	→ 13:20 …	13:26 →	14:00 →	③ 14:10

【第2日】11月8日（日）

〔往路〕

JR 高德線	高松	志度		貸切バス
	9:10	→ 9:25 (特急)	→	① 9:30
	9:16	→ 9:48	→	② 9:50

琴電	瓦町	琴電志度		貸切バス
	8:46	→ 9:20 →		① 9:30
	9:06	→ 9:40 →		② 9:50

〔復路〕

貸切バス		JR 志度		高松
① 15:15	→	15:37	→	16:04
② 15:40	→	15:59	→	16:48
		16:16 (特急)	→	16:32

貸切バス		琴電志度		瓦町
① 15:15	→	15:40 →		16:15
② 15:40	→	16:00 →		16:35

## ◆会場周辺地図



# ◆会場案内図



講義棟(5・8・13・14号館) 1階

